



Title	白井晟一建築作品の和室における空間構成について：天井の形状に着目して
Author(s)	羽藤, 広輔
Citation	デザイン理論. 2015, 65, p. 82-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56344
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

白井晟一建築作品の和室における空間構成について

— 天井の形状に着目して —

羽藤広輔／東京藝術大学

はじめに

本研究は、白井晟一（1905-1983）の建築作品における和室の空間構成について、特に天井の形状に着目して、その特徴を考察するものである。白井は、昭和期住宅史において、和風を手がけた代表的建築家の1人と捉えられ、その中でも特異な存在として位置づけられてきたが、白井の和室の特徴を明らかにする学術論文はいまだ見られない。また、本論で見るよう、白井の和室では、ユカ面の配置計画に呼応しない、天井独自に形状が決定されている例が多数存在することから、天井面の構成に空間構成上の意図が表現されている可能性が認められる。さらにその事例は特定の時期に限らず、活動期間を通じて存在することから、作品の変遷の考察が可能となる。よって本研究では、天井の形状に着目した考察を行っている。

研究の対象については、白井晟一建築作品における和室（畳敷の室）のうち、『白井晟一全集』（同朋舎出版、1988）図集I～VIおよび補遺に図面が掲載され、天井伏図またはその他の図面によって天井の形状が読み取り可能なものの、計76例を分析対象とする。

天井形式による和室の分類

76例の分析対象を〈天井断面形状〉と〈天井伏構成〉の2段階に分けて分類する。

〈天井断面形状〉は、図1に示す7種に分類できる。

また、一室内において〈天井断面形状〉がいかに組み合わせられているかを示す〈天井伏構成〉からは、図2の17類型が得られた。

4面の内部立面によって成立している矩形平面の室内において、各立面に〈天井断面形状〉が対応する形式が多く、このことに基づいた分類を行い、名称にも反映させている。1面のみに〈天井断面形状〉をもつ室は、まず「単」と表記し、その後に形状の種類を表記している。2面に〈天井断面形状〉をもつ室は、その形状同士の天井伏図上の位置関係から「L」または「ニ」と表記し、続けて形状の種類を2面分表記している。以下、同様に形式を表記している。

〈天井独自に形状が決定された和室〉の分析

白井の和室において、〈天井独自に形状が決定された和室〉すなわち平面計画上、段差なく畳敷のユカ面が続いている空間の上部で、落天井や下り壁等によって天井面の切り替えがなされている例は32例に及び、多くの主室級の代表的事例がこの形式に含まれる。

その天井面の切り替えの要因に着目して各事例を見ていくと、〈区分天井部〉（落天井や下り壁等によって同一室内の他の領域から区分された部分／図2、3でグレー表示）が展開図上のどのような要素と関連しているか等の観点から、図3に示すように9種の類型を得ることができた。

天井形式の類型に対する考察

まず図1について竣工年との関係を見ていいくと、〈天井断面形状〉7種類のうち「⑦四方勾配」を除く6種類が1953年までに出揃っており、その6種類は白井の創作活動を通じて時期的な偏りなく見られることがわかる。

また図2の類型については、1950年代前半から1960年代前半まで、単独の〈天井断面形状〉による構成が多数を占めていたが、1965年の「呉羽の舎」を境に複合の構成が多く見られるようになり、L字型、二の字型、コの字型といった位置関係で、各形状が複合するようになる。

以上より、白井の和室では、天井の断面形状の種類が早い時期に出揃っているのに対し、その組み合わせは年を追って複雑化する傾向があると言えよう。

さらに図3の類型と竣工年の関係について、32例を時系列に見ていくと、各類型の特徴を徐々に統合していくような方向で事例が展開する傾向が読み取れ、それは「床の間・出入口部を〈区分天井部〉としながら、主要開口部付近を高天井とし、場合によって隣室の秩序を取り込む」という傾向であった。

こうした傾向が顕著に見られる例として「雲伴居」書斎（写真1／1984）が挙げられる。雁行の構成をとる上段・床の間に切り取られた広間部分に、上部から別の整然とした秩序を与えるかのように、正方形の高天井部が設けられ、かつ、それは主要開口部と明確に関連づけられている。

また「②隣型」の要素も取り入れた例が、「昨雪軒」客室（写真2／1969）である。和室内において、床の間・出入口に呼応してL字型に〈区分天井部〉を展開しつつ、落天井の一部が隣の応接室に延長し、全体としてコの字型につながっていく。こうして2室を横断して形成された高天井部の奥行が、主要開口部の巾と整合するよう計画されている。

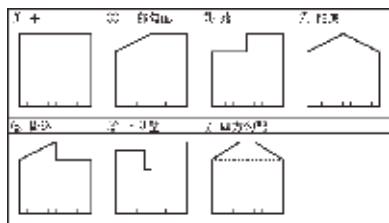


図1 〈天井断面形状〉 7種類

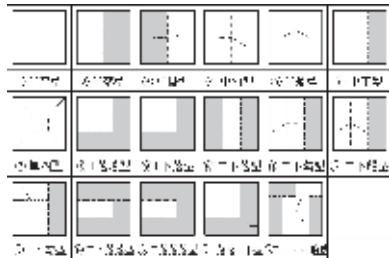


図2 〈天井伏構成〉 17種類

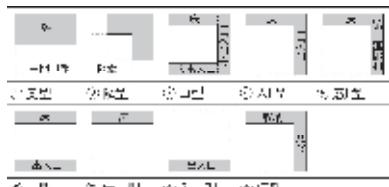


図3 〈天井独自に形状が決定された和室〉の天井伏9種類



写真1 「雲伴居」書斎（1984）



写真2 「昨雪軒」客室（1969）

図版出典

写真1：『建築文化1985年2月号』彰国社

写真2：『住宅建築設計例集・8 床の間廻りの詳細』建築資料研究社、1983